

生々

松島和志

銃声ではなかった時計の針の足音に驚き、汗ばんだシャツと背中の間隙に、冷たい風が送り込まれている。私は、とにかく、書き込まれたものの上を擦っているようだが、それは彗星の尾のように、引き延ばされて、散逸されていく、だけで、消えてしまうことはない。いちごの涙は、陶器の斜面に水っぽい赤色をのこし、私は、両手で持たねばならない言葉だけを探している。

少女の中に老婆が隠れるときも美しいが、畳み込まれた記憶の布が、痛々しく場違いな音、それも大きな音を立てることは好ましい。交差路を曲がるとひらける光彩を食いつくように眺めるとき、眼の無作法さにさりげなく驚ける政治性に失望する。空白の周りをなぞるようになされるお喋りが、生きることに付きまとう独特の臭みを忘れさせることに失敗するように、諸制度は私であり、私が世界の修理工である。煤だらけの手で、頁を手繰ることがやめられないのは、私自身を修復することはまだ、できないからである。

静けさの只中のバイオリニストの第一音のように、鋭く短く引かれた線はまだ私の体に残っているが、私の大きさの違う左右の眼を見てかわいそうと言った女が、私の生をもっとも祝福していたはずだ。ある日から、高くなった天井に、居心地の悪さは感じながらも、ようやくともに生きられる気がして、私は自分の体が流されてしまわないように、手で手を結んでいる。